

父のかまぼこオードブル

鳥取県 泉龍寺 住職 三島道秀

私が、小学校高学年の頃のことです。誕生日に親しい友達を自宅に招き、誕生日会をすることがありました。仲のよい子の誕生日会に呼ばれていた私は、子供心にも義理を感じ、お返しに呼んでもらった友達に「家で誕生日会をする」と約束しました。

しかし、その自宅での誕生日会を、両親には伝えていなかったのです。当日帰宅して、「今日は、家で友達と誕生日会をするから」と母に伝えました。その時の母の驚いた顔は、今でも覚えています。家で友達と一時間ほど遊んだ後、大皿にきれいに並べられた、かまぼこのオードブルが出されると、珍しさもあったのかみんな喜んでいました。

友達が帰った後、母が「今度友達を招くときは、前もって教えてね。お母さんが困っていたら、お父さんが料理を作ってくれたんだよ」と教えてくれました。急なことで食材も無く、困った母は、父に助けを求めたのです。当時、台所に立つ父を見たことがありませんでしたから「お父さんは料理ができるのか？」と不思議でした。

長じて、私も僧侶としての修行中、「典座(てんぞ)教訓(きょうく)ん」という、修行道場で料理を作る責任者である「典座」の心構えを学ぶ事になりました。「典座教訓」には、「典座は絆(ばん)をもって道心(どうしん)となす」とあります。「絆(ばん)」は、たすきを意味します。大本山永平寺を開かれた道元禅師様は、命と命が向き合う「食」

を大切にされ、たすき掛けをして心を配り、食事を作ることを、大切な仏道修行だとお示しになりました。それは坐禅をし、お経をお唱えすることと同じように大切なことなのです。

父は、五十四才で他界しました。修行僧の頃は「典座」の修行もしていたそうです。器用に包丁を使い、料理も上手だったと聞き、やっとなの誕生日会の父の作ったオードブルが腑に落ちたのです。私も、修業中「典座」を経験しました。また父のこともあり、喫茶店の厨房の料理の経験もあり、料理が好きになりました。

私は、毎日の家族の食事、朝早くから、子供たちのお弁当を作ることも苦では無く、買い物や、お供え物、頂いた野菜との出会いを無駄にせず、その時その時の食材を調理する事に、心の平安を感じています。日々の日常も、目には見えない「絆(ばん)」、たすき掛けの修行と心得ています。

あの日の誕生日会で、息子のために、父がたすき掛けで料理を作っている姿を想像すると、今も心があたたかくなります。そして、あの時の母の驚いた顔の意味が、今ではよく分かります。誕生日会を前もって話さなかったことで準備もできず、本当に困ったのだらうと申し訳ない気持ちです。私は、もうすぐ六十五回目の誕生日を迎えます。誕生日は、父と母への感謝の日です。